

今月の PICK UP



「現代語訳 近江の説話」 福井 栄一／著 サンライズ出版 S388.17

古典を読むのは難しくてしり込みしてしまいがちですが、現代語訳されたものならいかがでしょうか。

本書は『今昔物語集』や『古今著聞集』などから、近江を舞台とした説話17編を現代語訳したものを収録しています。一笑に付してしまうような突拍子もないお話もありますが、「三上山の百足退治」「安義橋の鬼、人を喰らうこと」などは昔話らしい怖さを感じられ、物語としての面白さを味わえます。それぞれの説話の後には解説が付いており、舞台裏を覗いたような感覚を覚えます。

「詠う叡山の水」「栗田の巨樹」「篠原の墓穴で雨宿りした男」など興味深いタイトルが並んでいますので、著者のおすすめ通り好きなページから読んでみませんか。

司書の おすすめ

「まちの植物のせかい」 鈴木 純／著 雷鳥社 470.7 ス

最近じっくりと植物観察をしたことがありますか？

この本には、日頃からよく見るような植物の観察のコツが載っています。読んだ後は、街中で目に留まる植物の愛らしさとたくましさに気づいて、思わず植物にぐっと近づいて細かなところまで観察したくなるでしょう。そして思わぬ発見をすると、見慣れた公園や空き地が自分のテリトリーのような、より身近で親しいものに感じるでしょう。

「レスキューナースが教える プチプラ防災」 辻 直美／著 扶桑社 369.3 ツ

災害レスキューナースとして25年のキャリアを持つ著者が、災害に対する備えや被災後生き抜く知恵を様々な具体例をあげて解説しています。その備えの威力は、2018年の大阪北部地震で被災した、著者の自室の写真でよくわかります。室内がほとんど乱れていないのです。きちんと対策するとこれほどにまで効果があるのかと驚かされます。

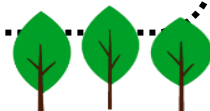
いつくるかわからない災害。その実際をよく知って対処する方法をこの本が教えてくれます。



「万葉の花」 片岡 寧豊／著 青幻舎 911.1 カ



新元号である「令和」の典拠となったことから、にわかに注目を集めた万葉集。この本は、そんな万葉集に詠まれた花と、その由来などを分かりやすく紹介したものです。万葉集の和歌を解説とともに味わいつつ、美しい写真に癒されたり、現在とは異なる花の名前に雅な気分浸ったり。様々な楽しみが詰まった一冊です。



「巴里の空の下オムレツのにおいは流れる」 石井 好子／著 河出書房新社 596.21

著者の石井好子さんはシャンソン歌手・エッセイストとして知られた方です。本書は(一応)料理本という位置づけですが、戦後間もないころに単身飛び立ったパリで食べたおいしいもの、出会った人との交流なども綴られていて、紀行文としても楽しめます。冒頭の、下宿先のマダムがオムレツを作ってくれる場面の描写がすばらしくおいしそうなので、その部分だけでもぜひ読んでみてください。

